

論文要旨

アネッテ・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフの詩学——ジェンダーと作家性を中心に——

麻 生 陽 子

本論文は、19 世紀前半のドイツの作家アネッテ・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフ (1797-1848) の作品における創作技法にジェンダーの観点から光をあて、彼女の「作家性」と詩学の関係について考察するものである。

1876 年に『ドイツのノヴェレの宝』に採録されて以降、1842 年に発表されたドロステの代表作『ユダヤ人のブナの木』は、19 世紀のドイツにおける模範的な「ノヴェレ」として後世においても読まれ、彼女の名は「19 世紀最大の女性の詩人」という評価とともに現在もなお文学史に残されている。しかしながらとりわけ 18 世紀後半以降、文学市場の発展と成熟にともない、数多くの女性の書き手が誕生していたことも忘れてはならない。18 世紀から 19 世紀までには少なくとも 1500 人もの女性の書き手が存在したと推測されているが、彼女たちの作品はその同時代には一時的にもてはやされたものの、その大半が後世においては忘却される運命にあった。その一方でドロステをはじめとするもっぱら少数の女性がドイツの「もっとも偉大な」女流作家と呼ばれ、文学史に名を残した経緯にかんして、このいかがわしい最上級の呼び名は、彼女たちの卓越した才能や偉業にかんするものではなく、男性を中心とする作家のなかで彼女たちが例外的で特別な存在であったことに由来するものだと指摘されている。そもそも大多数の書く女性の存在やそのテキストを黙殺してきた従来の伝統的な文学史の記述において、一部の少数の書く女性のみを特別視し、例外的存在として扱うことには問題がある。また、「もっとも偉大」とされた既存の書く女性の作品についても、書く男性の場合と同じ美的な観点からの評価がなされていないという可能性すら考えられる。こうした状況を是正するべく、女性解放運動の波とともに興った 1970 年代以降のフェミニズム文学研究の仕事の中心は、既存の女性の作家の作品の再読や再評価とともに、文学史で名が挙げられることのない埋もれた女性の書き手の発掘にある。

創作活動の前提となる教養をはじめ、発表のための公の場へのアクセス方法などにかんする書く女性が置かれた歴史的・社会的な状況は、書く男性の場合とは異なっており、それゆえ大半の書く女性は、書く男性と対等の存在としては認識されていなかった。しかし女性の社会進出が進むにつれて、文学をはじめとする様々な領域における女性たちのめざましい活動は、男性の確固たる自己を揺るがす性的な他者としてさらにいっそう無視できないものとなっていたはずである。20 世紀半ば以降、文学解釈においてテキストと作者の

主体性や権威、およびその価値を疑問視する議論が活発となり、これにたいしてフェミニズムの立場からは、そこで問題とされた「主体」や「作者」というカテゴリーを、自律した男性を中心とする制度化されたものとして批判的に検証する見方が提示され、書く女性たちは、男性の場合とは異なり「主体の危機」にすら陥っていないという複雑な事情にも注意がむけられるようになった。

本論文のテーマである「作者性、作者であること (Autorschaft)」はほんらい、発言意図をもつ権威という意味において作品にたいして行使しうる精神的な権限や、著作権の所有という意味での法的および経済的な権限を有することを意味する。18 世紀後半以降、男女の性差が二項対立的な確固たるものとして考えられるようになり、「作者 (Autor)」もまた、男性を含意する性別化されたカテゴリーとして作り出されていった。それ自体、女性だけでなく名の知られていない少数派の書き手を排除し、それを容認するメカニズムとして機能していたのである。性差にもとづく「天才」や「創造性」といった観念とともに男性を中心とする自律的なカテゴリーへと変質を遂げた「作家性」という理念にたいして、当時の書く女性は、テキストにたいする自立した著作者という意味での「主体」からは排除された存在として、あるいはもっぱら男性の作家が描く客体として位置づけられてきた。したがって作品にたいする権限をもつことを意味する「作者性」とは、男性が女性を意のままにすることのできる権限とも呼べるものである。本論文では、19 世紀前半に詩人として活動したドロステが「作者性」をはじめとする男性中心的な構想にたいしてどう対応し、それらを内面化することなくどう捉え直していったのかについて検証する。なお、ドイツ語の *Autorschaft* には、上記で述べた作者と作品の関係にくわえ、職業としての作家であることをあらわすレベルの異なる二つの意味がある。本論文では、この時代に生きた作家としての彼女の意識も問うべく、この語を「作家性」と訳しておく。

ドロステの詩学にかんする先駆的な研究として、リープラントは、保守的なカトリックの貴族の令嬢という従来の観点ではなく、文学的な伝統にたいする意識に着目し、作中で使用されている男性中心的な創作神話や伝統的な文学モチーフ等にかんする分析を行っている。そしてそれらがことにジェンダーにもとづいて創造的に書き換えられている点について、リープラントは「創造的な再構成 (kreative Refaktur[])」と呼んでいる。本論文もまた、彼女が提唱した「創造的な再構成」という見解、および従来の文献学的な先行研究の知見を援用しながら、ドロステが作中で依拠した伝統的な文学モチーフやトポス等の書き換えのパターンおよびテーマ等の連関を、書き手の性／ジェンダーという観点から

考察し、彼女の作家性と詩学的な側面との関連をあきらかにするものである。ドロステの若書きのテキストでは、女性を芸術の主体として位置づけることを阻む「天才」というカテゴリーが扱われており、そこでは彼女もまた当時の非対称的なジェンダー規範を多かれ少なかれ内面化していることが示唆されている。しかししだいに彼女の創作は、そうした規範の網目を掻い潜っていくほうへと変化していく。ドロステ作品において、書く女性のジェンダーは決して固定されたものではない。歴史的に構築されてきたジェンダーや性そのものを相対化した、性別という枠組みにとらわれることのない創作の可能性もまた認められる。他方、そこでは自身の女性というジェンダーを逆手にとり、女性としての視点を打ち出すことで生まれる、男性中心的な文学モチーフとのあいだの差異としての表現も散見される。

本論文では、ドロステが創作をはじめた 10 代から 40 代の円熟期に書かれたさまざまなジャンルに依拠して書かれた作品をほぼ成立年順にたどる。ただしそこでは、ドロステにおけるすべての文学ジャンル、および重要な作品が網羅的には論じられていないことを断っておく。しかしながらこれまでドロステ研究において注目されてきたとは言い難い戯曲をはじめ、リープラントの研究でも取りあげられていない作品を扱いながら、十分には検証されていない観点から分析を試みた点に、本論文の独自性がある。

第 1 章では、女性が劇作品を書くことが珍しかった時代に悲劇という文学形式を選択することでみずからの文学的な野心を示した、若きドロステの最初の本格的な創作『ベルタあるいはアルプス』（1813/14 年）を扱う。シラーの『ヴィルヘルム・テル』やゲーテのテキストを再構成して創作されたこの未完の悲劇は、男女の身分違いの恋の物語という体裁をもつ。そこでは、非対称に価値づけられた男女の両性具有的な姿を通して、芸術家存在の主体としてのあり方が孕む問題が浮き彫りにされる。ヒロインのベルタが抱く芸術への憧れは、自由を象徴する理想的なトposとして 18 世紀後半以降みなされていた「アルプス」の隠喩であるフェルスベルクという名の男性の芸術家によって表現されている。芸術の領域を体現するこの人物は、男性性と女性性をあわせもつ男性の芸術家、すなわち「天才」のように造形されているのにたいし、「男っぽい」と形容される芸術家気質のヒロインの両性具有性は否定的に捉えられている。19 世紀前半にはもはや絶対視されるものでなかった男性中心的な「天才」が問題視した本作では、女性もまた芸術の領域に参与する主体であることを裏づける要素として、女性の両性具有の否定性が肯定的に捉え直されることで、男女という二項対立的な性別の枠組みを超えるあらたな書く主体もまた構築されている。

芸術創造をめぐるジェンダー規範との緊張関係を描きながら、表むき恭順にも似た態度で非対称的に価値づけられた所与のモチーフのうちに表現の可能性を忍ばせようとするドロステの試みは、ゲーテの『コリントの花嫁』を書き換えた、バラード『ローデンシルト嬢』（1840 年）にも認められる。比較的研究の蓄積がある本作にかんして第 2 章では、ゲーテのバラードとの比較を通じて女吸血鬼というモチーフの分析を行う。ドロステが描いた吸血鬼的な分身は、あらゆる社会秩序や規範からの逸脱者であることを示すと同時に、「男性の詩人 (Dichter)」の理想とされた「天才」から排除された「女性の詩人 (Dichterin)」の表象である。復活日に蘇る吸血鬼的な分身の姿には、イエスになぞらえられる男性の「天才」にたいする揶揄が表現されているだけではない。本作では、吸血的な自己の分身との対峙を通じて、みずからの潜在的な願望に自覚的になったヒロインの狂気の舞もまた描かれている。女性において狂気は、完全なる生存のあり方から疎外された、吸血鬼的な生ける屍にひとしい状態からの復活の兆しをしるしづける肯定的な要素なのである。

第 3 章では、ドロステが半匿名で発表した『医者 の 遺言』(1833/34 年執筆、1838 年発表) を扱い、表象されがたい書く女性の姿が可視化されていく様子を示す。本作で非女性的な叙事詩というジャンルおよびリアリズムの描写方法を選んだドロステは、書き手のジェンダーと表現方法との非一貫性に創作上の美的な効果を見出していた。本作で描かれているのは、真夜中の山中でのトラウマ体験を 40 年後に遺言として「書く」医者 の 姿である。擬人化された自身の分身と対峙することでその内面世界を象徴的に経験し、それを書き記すことを通じて、伝統的な詩人のトポスである医者もまた分身らと同様の生死の境界に立つ患者のような姿から死者へと変貌する。医者 の 遺言を「書く」行為の比喩となるのが、吸血鬼的な姿をした女性テオドーラの「書く」行為にはかならない。彼女は、現実世界で許容された医者という書く男性の内面に沈潜する衝動の実行者、すなわち分身である。テオドーラはまた、医者 の 患者である男に台所用のナイフで刺傷を負わせたと考えらえる人物でもある。本作では、19 世紀後半以降のモデルネの文学に特徴的な、テキストと書く行為のあいだの緊張関係が、神様の贈り物という意味の名をもつこの女性によるナイフを用いた殺傷行為とペンで書く行為、さらには刺傷を負った身体と文字が書かれたテキストの同質性としてくりかえし描かれており、そこではさらに、男と女、医者 と 患者、書き手と読み手など、諸々の存在の境界が攪乱される様もまた表現されている。

19 世紀以降、遺言は法的拘束力を失った死者を書き手とするテキストだった。その意味において医者 の 遺言は、女性のペンで書かれたテキストの隠喩であろう。しかし本作の医

者は、死後も遺言に潜在する語り手として読者の運命に関与しつづける。書き手の死後も読者に多大な影響を及ぼしつづけるテキストとしての遺言の描写には、不特定多数の読者の存在を視野に入れて創作を行っていたドロステの意識もまた反映されている。

1840 年に執筆された喜劇『ペルデュー！あるいは出版人、詩人、そして文学かぶれの女たち』では、三月前期という文学が読者に迎合するものに変質しつつある同時代を背景にした、さまざまなタイプの書き手とテキストとの関係が一種のパノラマのようにドロステの実体験をふまえて描かれている。本作を手がかりに第4章では、三月前期においてドロステが理想とした作家としてのあり方と彼女が掲げた詩学との関連を考察する。同時代の文学の傾向や作家としての栄誉の獲得に惑わされることのない書き手は、登場人物の一人であるティーレン夫人として造形されている。ティーレン夫人を含むものを書く女性たちは、作中で「文学かぶれの女」と呼ばれているが、この語が反映するのは、19世紀初頭ますます文学の世界に参加するようになってきた、ものを書く女性たちにたいする蔑視である。彼女は、同時代の著名な男性の「桂冠詩人」以上の才能をもつ人物ではあるが、この侮蔑的な肩書きを気に病んではおらず、またこの呼び名に異議を唱えることなく、同時代への迎合を頑なに拒みつづける。自身の詩学に忠実な姿勢を貫くあまり、同時代の読者の期待に背いてものを書こうとする彼女の態度は、同時代に作品が読まれる可能性をみずから手放す高慢な行為である反面、「うぬぼれた」時代の表舞台から潔く降りることを意味する。彼女がとったこの選択は、性の別を問わず、自身が理想とする創作の姿勢を貫きがたい状況、さらには自身につきまとう「書く女性であること」に付随する制約から解放された自由な状態を導く処世術でもあった。

同時代に迎合することのない書き手としてのあり方への追求は、ドロステのライフワークとなった散文『ユダヤ人のブナの木』の創作技法にも認められる。第5章では、個々の文学的なモチーフや先行テキストの分析を行いながら、本作が、最終的な解決を拒むように多義的な解釈の余地を残したいわば反犯罪物語であるだけでなく、「うぬぼれた」同時代の読者の趣向を逆なでするように、読者にたえず自己省察を強いる物語であることを指摘する。すべてを一望のもとに包括する、超越的な視点の持ち主であるドロステは、犯罪物語という体裁のもとで、立場を異にする一人称の語り手をみずからの共犯者にし、読者を早急な裁きへと誘惑しながら、裁きの禁止を序詞で警告する。そして同時代の読者に対峙し、女性を含む「誰でもない者」にかんする倫理的な主張を行なうこの物語を根底で支えているのが、人物同士の関係にみられる分身／鏡像のモチーフであり、西欧古典文学

や聖書、親戚が書いたテキストなどの、解釈の糸口を与える先行テキストである。くり返し読まれるテキストの永続性にこだわって創作を行うことで、ドロステは文学が商品として短期間で読み捨てられていく三月前期の文学状況にたいして懸念を示しながら、作家として同時代の読者との対峙に果敢に挑んだのである。

「うぬぼれた」同時代の読者に背をむけることを宣言し、ジェンダー規範を含む時代の制約から逃れようとしたドロステは、「100年後」の読者をも見据えた創作を行った。それは、決して彼女の詩学と矛盾するものではない。また、書く女性というみずからのジェンダーに自覚的であったドロステは、多岐にわたる文学ジャンルを意識的に選び、所与のモチーフや先行テキストを書き換えることで、自身の文学的な野心、そして伝統を継承する詩人としての立場を表明しようとした。彼女が貫こうとした、時代に左右されることのない創作のあり方は、みずからのジェンダーや同時代に自覚的なものでありながら、同時にそれを掻い潜るものだったといえる。ドロステはみずからの書く行為を作品のなかで表現しつつけた。彼女の作家性は、みずからの書き手としてのあり方を問いの形で書きつづけることにおいて存在したのではないだろうか。